

近江の古地図「江州之圖」をよむ

加藤
賢治

Title :

Reading an Old Map of Omi, "Goshu no Zu"

Summary :

In April 2012 part of an old map presumably drawn in the Edo Period was brought to the Omi Multicultural Institute at Seian University of Art and Design. This map, titled "Goshu no Zu" (Map of Goshu), had certain characteristics that set it apart from the usual thematic maps of its time, such as detailed explanations pasted directly on the map, as well as several postscripts and corrections. In this paper I would like to shed light on who drew the map, approximately when it was drawn, and what the purpose of the map was.

はじめに

平成二四年四月、本研究所(成安造形大学附属近江学研究所)に一幅の古地図が持ち込まれた。この地図は地図本体と収納ケースに「江州之圖」と表記されているため、この報告書では「江州之圖」と呼ぶことにする。

「江州之圖」は近江古地図の収集・研究者として知られる松井善和氏の最新の所蔵品である。後で詳しく報告することになるが、この地図は、地図上に細かく説明文が貼付けられ、また付け足し部分や修正箇所が複数あるなど、何か一つの目的のために制作された一般的な主題図としては珍しい特徴を持つため、本研究所に相談があった。

研究所では、早速、日本近世史が専門で本研究所客員研究員水本邦彦氏(長浜バイオ大学教授)に指導・協力を依頼し、この地図の調査を開始した。

一見して何を目的に制作されたものであるかの判断が難しい地図であるが、まず、地図上に書かれている文字を読むことから始めることにした。

その結果として、この「江州之圖」が、いつ頃、誰によって、

加藤 賢治

何のために制作されたものかを推測し、以下に報告する。

第一章「江州之圖」の特徴

一― 外形的な特徴

この地図の大きさは、全体が一四九cm、二三九cmの長方形で、三〇cm、三八cmの大きさに折り畳んで収納ケースに入れるようになっている（写真1・2・3）。広げると先ず目に飛び込んでくるのは濃紺で表現された琵琶湖である。これは地図上に藍色で塗られたものではなく、紺紙が台紙の上に貼られている。また、郡名、村落名、街道名が直接地図に記されているが、寺院や村落の詳細な説明が書かれ、貼り紙というかたちで地図上に四箇所貼られている（写真4）。郡名はすべて貼り紙で記され、十二郡が貼られているが、かつて存在したという「善積郡」という郡名が琵琶湖の真ん中に貼られている（写真5）。

東海道の一部が鈴鹿峠方面に延長され、二八cm、三九・六cmの長方形の紙が付け足されている（写真6）。

一― 表記内容の特徴

琵琶湖の東側に朱色の線が二本引かれ、当時の彦根藩の玄蕃殿の領地が示されている。この地図の中でもこの朱色二本線は非常に目立っている。

紺紙の貼り紙で表現されている琵琶湖のかたちは、北湖が非

常に大きく表現されているが、湖岸線は比較的単純である。一方南湖は小さく表現されているが湖岸線のかたちは北湖に比べて詳しく正確に表現されている。また、湖から眺められる山々は、南湖の西側と湖東を中心に詳しく表現され、着色されているが、北湖から眺められる湖北と湖西の山々は省略され、単純な線で描かれている。

地図上に表記されている主な内容は、川や湖の他、湖岸に面した集落の名前と家の数、そして主要街道（東海道・中山道・朝鮮人街道・北国海道）沿いの集落名と家の数である。それらの集落についての説明が直接書かれているところもある。それ以外の集落は全く書かれていない。（写真7・8）

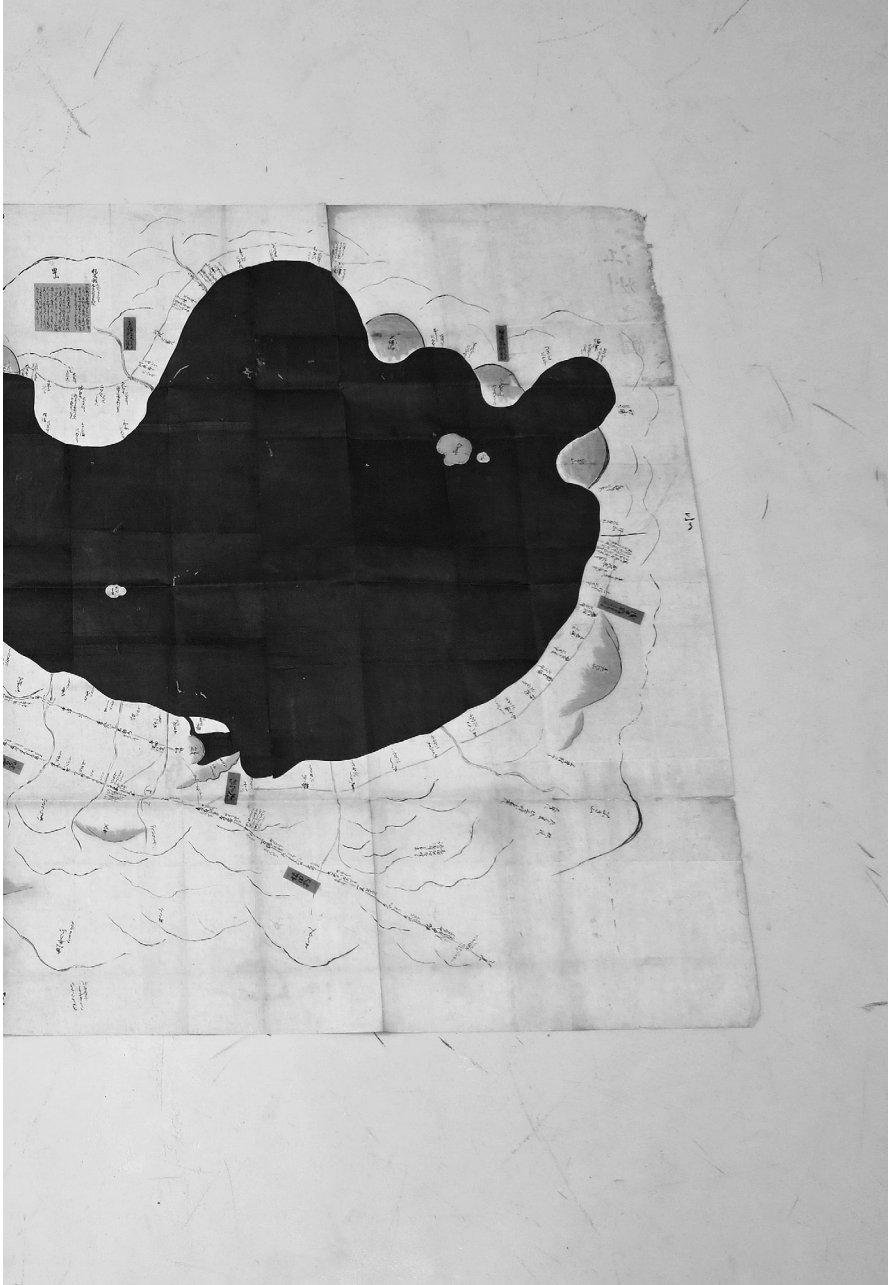


写真1：「江州之圖」の全容



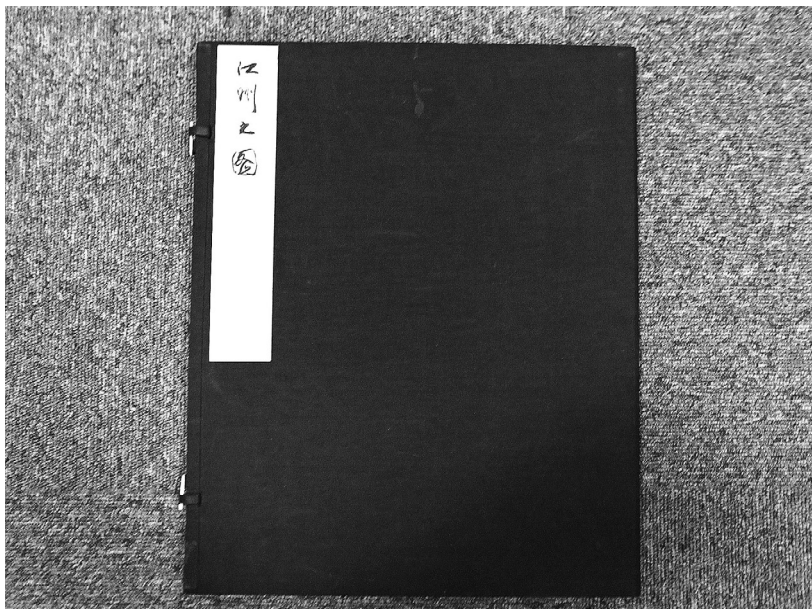


写真2：「江州之圖」と書かれた収納ケース

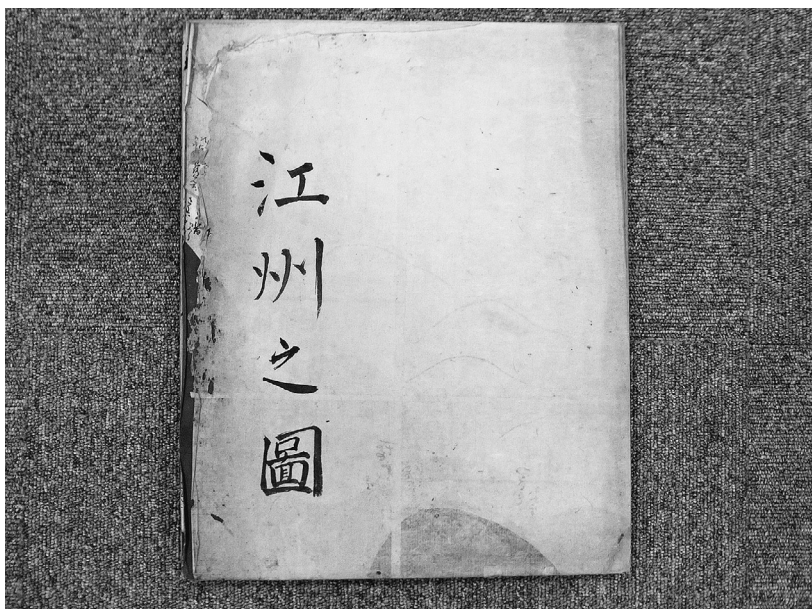


写真3：地図本体に書かれた「江州之圖」

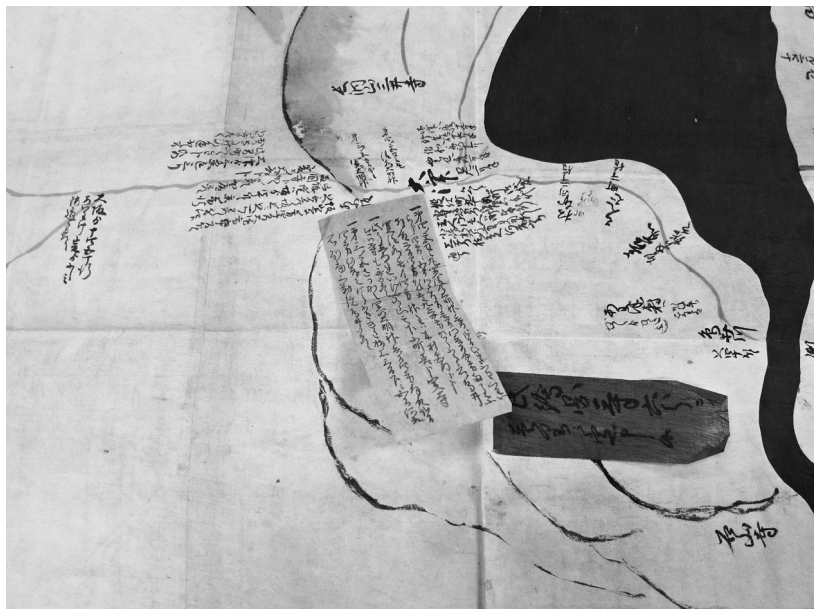


写真4：地図上に貼られた4枚の説明書きの内の一つ。大津から京都に向かう街道沿いにある社寺の説明が書かれている

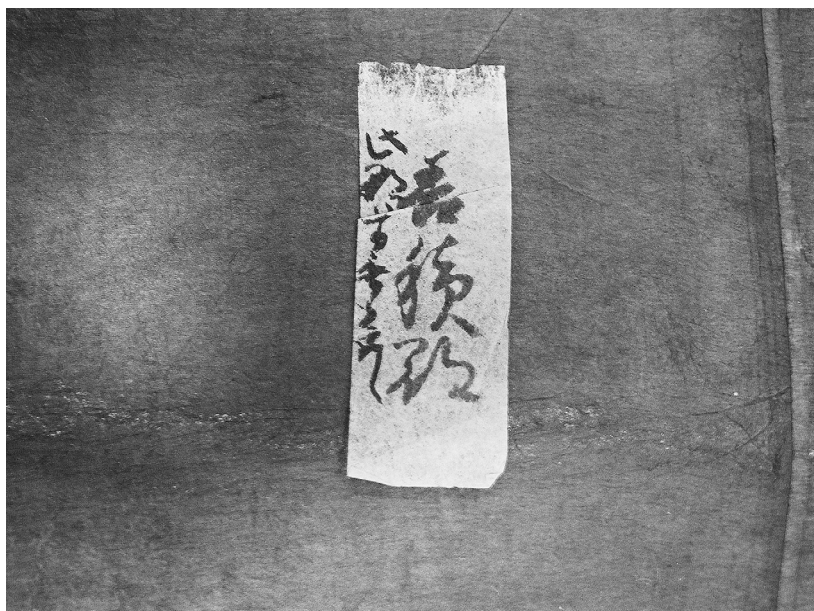


写真5：琵琶湖の中央に貼られた善積郡と書かれた郡名。地図制作当時にも存在しない郡である

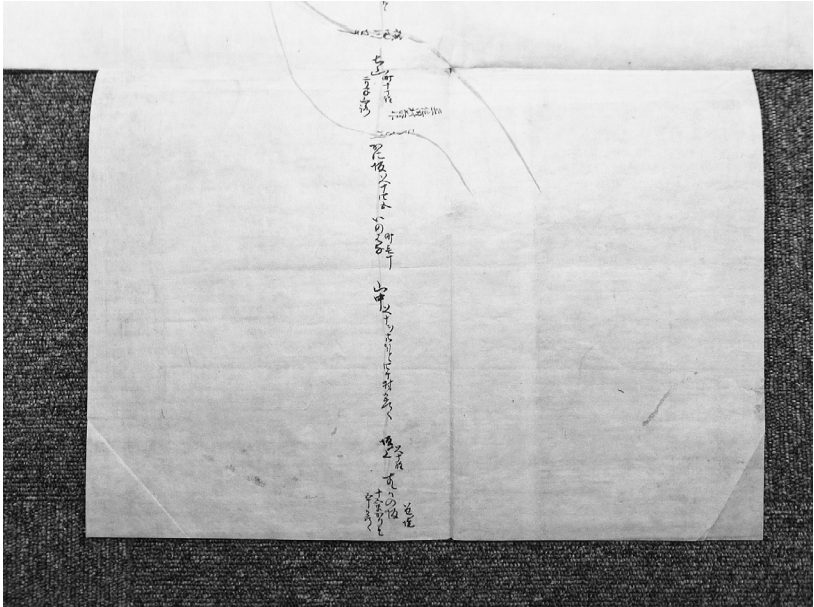


写真6：付け足された東海道沿いの集落部分

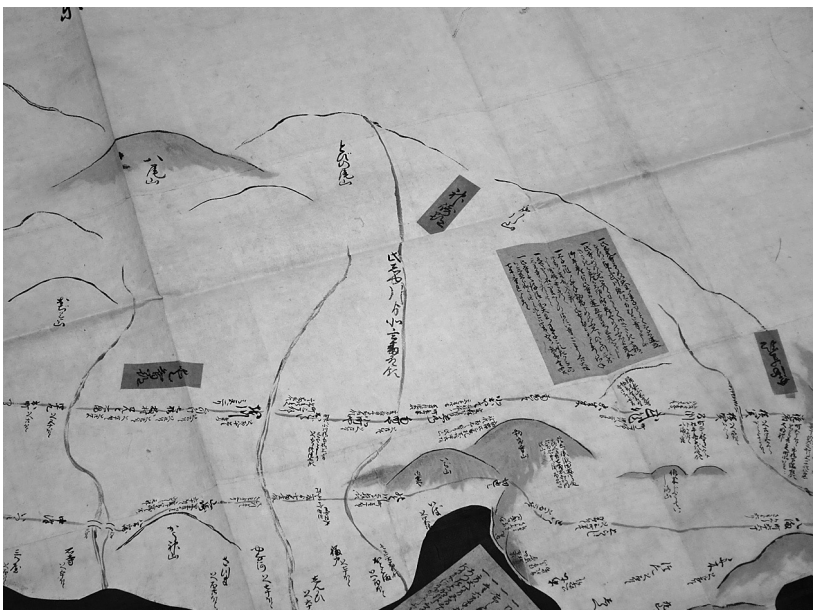


写真7：中央に朱線があり、玄蕃殿の所領の境界線が示されている。また、この辺りの山は着色があり丁寧に書かれている。街道沿いと湖岸の集落名と家数が書かれている

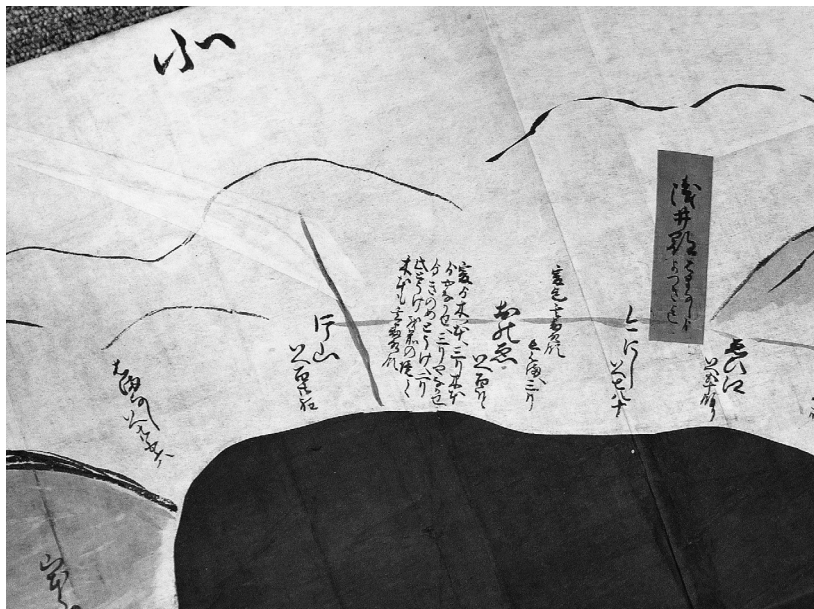


写真8：玄蕃殿の所領の北限が示されている。この辺りの山は省略され単純な線で表現されている

第二章 制作年代の推定

二一 説明書きを探る（五月一日の地震）

四枚貼られている説明書きのうち、大変興味深いのは朽木村（現高島市）の紹介をしている一枚である。そこには五月一日の地震についての被害の様子が細かく記されている。

―五月一日の地震の説明書き―（写真9）

一、此谷ノ内、市場ト申所いへ（家）百五十ほど（程）

御座候、兵部殿在城ニ御座候、五月

朔日ノ地しん（地震）にいへ壱つも不残つふれ（潰れ）

申候、兵部殿御死去、其外七十人ほど

死申候

一、此辺ニ糸の木（榎）村ト申所、いへ五十程

御座候、うしろの山くつれ（崩れ）かかり、人馬

共ニ壱人もたすかり不申、朝ニはやく

山へ式人参候者斗（ばかり）いき（生き）申候、其外八ま（浜）ノ

商人式人材木かい（買）ニ参候、其者ノヤと（宿）ノ

前ニ長さ十四五間ノ具い多（杭太）壱本

御座候、此うら三尺はと見へ申二付、ほり（掘り）

候て、七日目二ほり出し、たすかり申候
此所今ハふち（淵）ニ成申之由ニ候

現代語訳

一、この谷ノ内の市場というところに家が一五〇軒ほどあった。
兵部殿（元朽木の領主朽木宣綱）が城にいたが、五月一日
の地震で家は一つ残らず潰れ、兵部殿の他、約七〇名が死
亡した。

一、この辺りの榎村というところに家が約五〇軒あり、うしろ
の山が崩れ人馬ともに一人も助からなかった。

朝早く、山へ行つた二人だけが生き残っていた。その他、
浜の商人が木材を買いに二人で来ていた。その者が泊まっ
ていた宿の前に、長さ十四五間の杭太が転がつており、そ
の裏が三尺程見えていたので、そこを掘り返した。

七日目に掘り出し、二人は助かった。その場所は今、淵に
なっている。

年号は記されていないが、地震の甚大なる被害の様子がその
説明で理解できる。近世にこの場所でこれだけの被害をもたら
した歴史地震で、五月一日に発生したというものは、寛文二年
（一六六二）の午の刻（正午頃）に、湖西岸の花折断層北部を
震源地として起つた「寛文近江・若狭地震」の他に考えられな

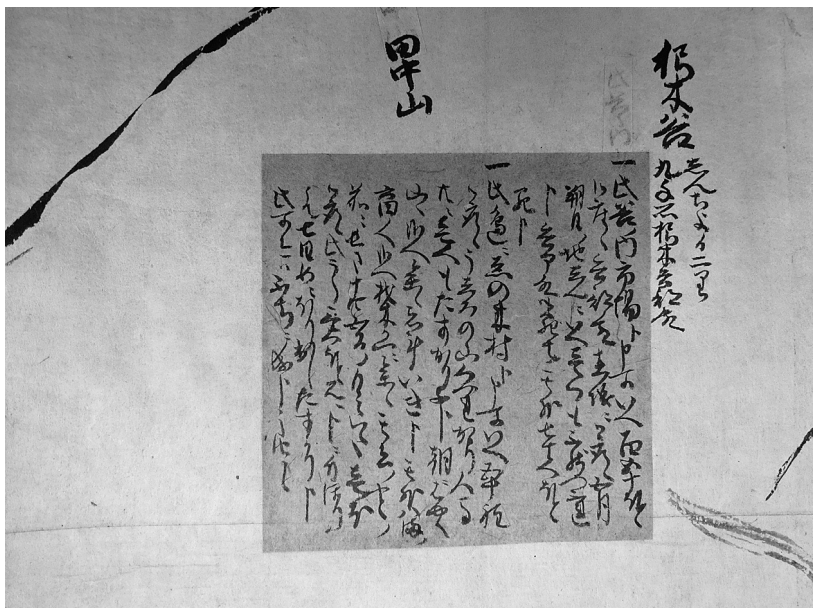


写真9：朽木村の説明書き部分。寛文二年に発生した地震の様子が書かれている

い。

この地震は推定マグニチュード七・六という内陸地震としては異例の大規模地震で、推定震度も湖西地域は震度七であったと考えられている。もちろん被害は相当なもので、現在の高島市の大溝では九八二軒の家屋が潰れ、死者三七名、榎谷では五〇軒の家すべてが倒壊し、村全体が全滅したと伝えられている。また、朽木谷でも大規模な崖崩れが発生し、元領主の朽木官網が家屋の下敷きになって死亡したと伝えられている。

湖西だけでなく、大津・膳所・彦根など琵琶湖沿岸の諸都市でも家屋の倒壊など大きな被害が記録されている。若狭地方でも日向断層が連動して地震が発生、三万五湖の周辺で地盤の沈降と隆起が起り、周辺の田地が冠水するなどの被害が出たと伝えられている。

地図上の貼り紙に記載されている地震はその発生の日付（五月一日）によってもこの「寛文近江・若狭地震」であることに間違いないと考えられるが、果たして本当にこの年に書かれ、貼られたものであろうか。

それについてはもう少し周辺の記述に注目する必要がある。その辺りは次項で報告したい。

二二 地図上に書かれている領主の名前を探る

この地図上には当然貼り紙だけではなく、直接文字が書かれている。それらは地名以外にもその当時、その地域を統治する

領主の名前が記されている。それらの領主を調べることで、ある程度の年が判明する。

まずはこの「江州之圖」琵琶湖の東側に「このしゅ引より北玄蕃殿領」（写真10）と書かれた、朱線で区切られた領地を所有する「玄蕃殿（げんぱどの）」から考えてみる。湖東の朱線で区切られる範囲は、間違いなく彦根城を中心とする彦根藩井伊家の所領であることは間違いない。ただ、「玄蕃殿」とは誰を指すのであろうか。井伊家は二代目藩主直孝が掃部頭（かものかみ）という官職名を得てから代々井伊家といえば掃部頭であったが、玄蕃頭（げんぱのかみ）という官職を得た当主もいる。

井伊家で最も早く「玄蕃頭」の官職を持つのは、四代目当主井伊直澄で、二〇歳のときである。万治二年（一六五九）に三五歳で井伊家の当主となり、寛文五年（一六六五）四一歳の時に掃部頭を得る。

寛文二年（一六六二）の大地震の年は間違いなく玄蕃頭（玄蕃殿）が彦根藩の当主であった。

他の地図上に現れる人物も見てみたい。

一人は湖西の大溝に書かれている「分部若狭」である（写真11）。大溝藩を長らく支配した分部氏であるが若狭守という官職名を得た人物は誰なのか。系図を見ると万治三年（一六六〇）に分部嘉高が一三歳で若狭守の官職を得ている。そして嘉高は寛文七年（一六六七）二〇歳でこの世を去っている。この嘉高

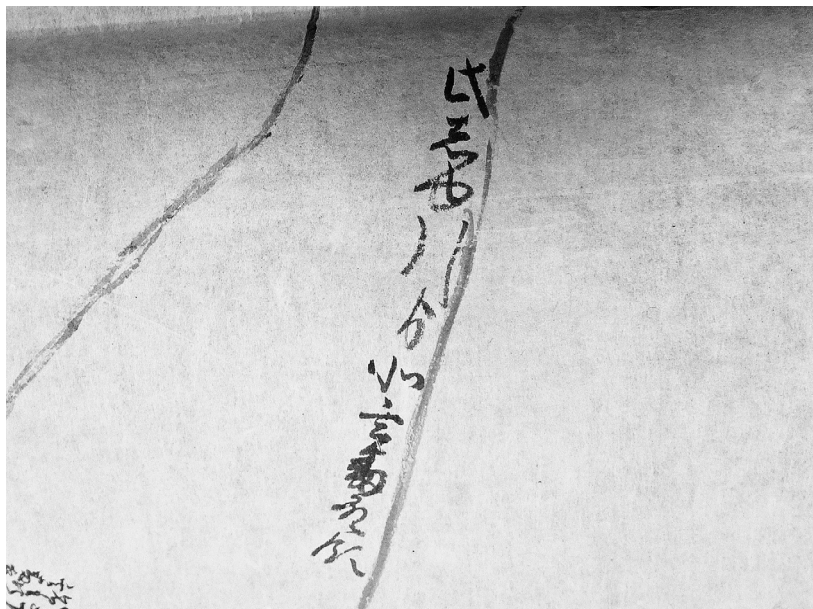


写真10

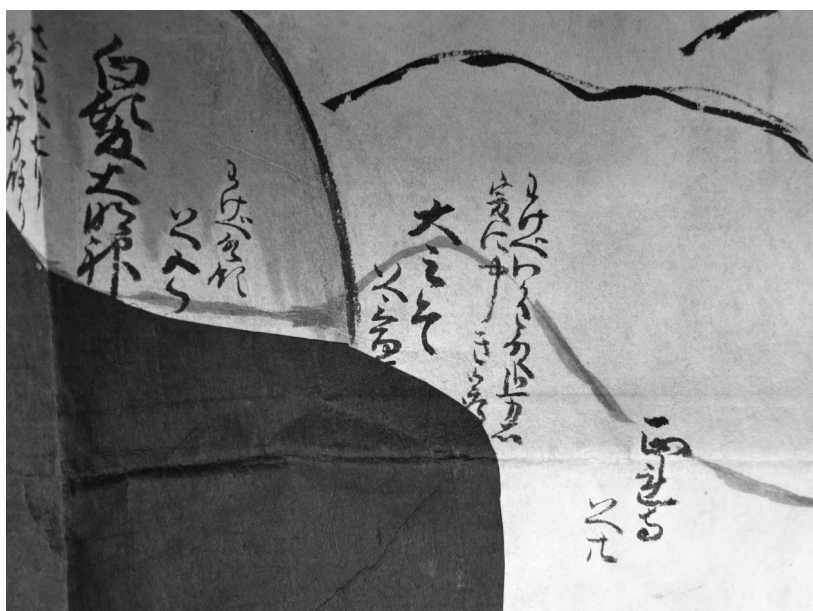


写真11

の父は伊賀守嘉治で寛文の地震でその伊賀守の家臣が被害に遭っている記事が『玉露叢』に見られる。

もう一人は「朽木伊予」と書かれている人物である(写真12)。

系図を見ると朽木植昌が明暦三年(一六五七)に一五歳で伊予守となっている。そして大地震の前年の寛文元年(一六六一)官職は変わらず、一九歳で朽木家を相続している。

もう一人紹介したい。甲賀の水口に説明書きがある「山口但馬」である(写真13)。系図によると山口弘隆が寛永九年(一六三二)、三〇歳のとき但馬守となり、寛文五年(一六六五)、六三歳で修理亮に変わっている。

二・三 「江州之圖」の制作年代の推定

地図に直接書かれている人物の官職を見ていくと、「玄蕃殿」
 井伊玄蕃頭直澄、「分部若狭」
 分部若狭守嘉高、「朽木伊予」
 朽木伊予守植昌、「山口但馬」
 山口但馬守弘隆というようにそれぞれ個人が特定され、それぞれの在任期間に寛文二年(一六六二)という「寛文近江・若狭地震」が発生した年が含まれていることが明らかとなった。

朽木村の説明文として「寛文近江・若狭地震」の記事が書かれていた貼り紙には、年号の記述が見られず、五月一日の地震とのみ記載されていた。「寛文近江・若狭地震」はこれまでの研究・調査や資料によって寛文二年(一六六二)の旧暦五月一日の正午頃に発生したと解っているので、そのまま理解すると、

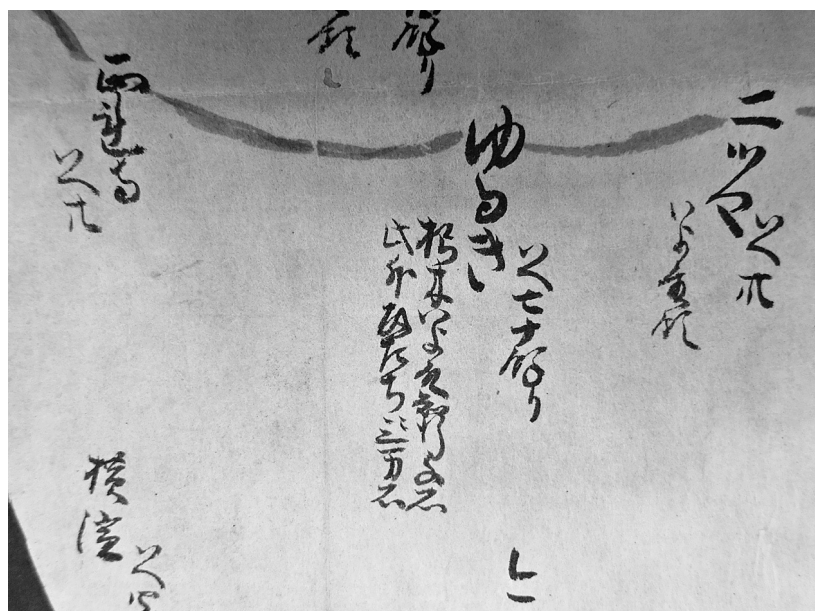


写真12

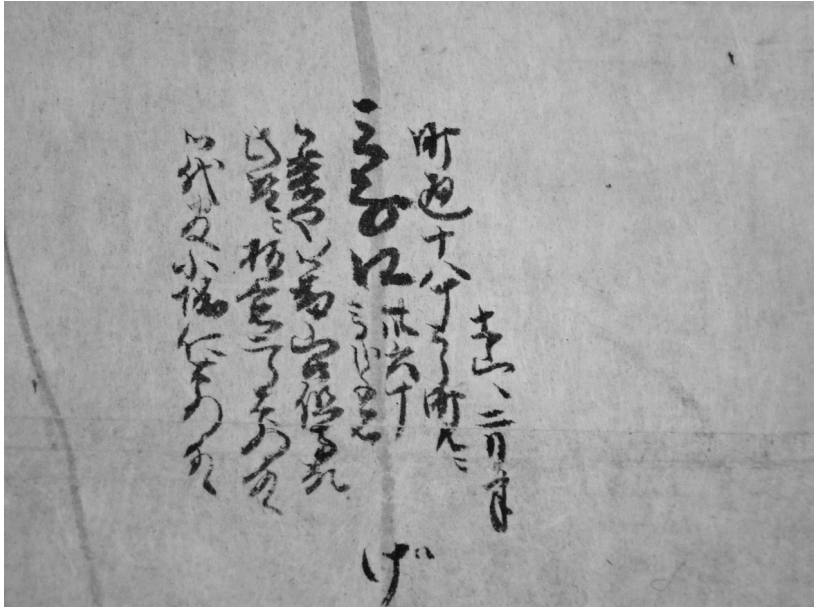


写真13

年号の記載が無いということは、この貼り紙が書かれたのは、その年、すなわち「寛文近江・若狭地震」が発生した寛文二年（一六六二）であると考えて差し支えないであろう。

第三章 「江州之圖」の制作者と制作意図について――

三― 考えられる制作意図

制作年代は特定できたが、この地図は一体誰が何の目的で制作したのであるうか。上から貼り紙をして訂正してある箇所が多くあり、東海道の延長で大きな付け足し部分もあるというこの地図の様子から、制作途中であるか、あるいは下書きのように扱われていたとも推測できる。

一つの国単位で制作される地図については、「国絵図」がその代表である（写真14）。国絵図とは江戸幕府が主要な大名に命じて旧国単位でつくらせたもので、作成年代順に慶長国絵図（一六〇四）、寛永国絵図（一六三三）、正保国絵図（一六四四）、元禄国絵図（一六九七）、天保国絵図（一八三五）と呼ばれる国絵図が知られている。各国とも現存するものは少ないが、描かれている内容は山、平野、川、湖などの地形と、主要街道、村落名が主である。石高や家数、旧跡などの詳細な事項は描かれていない。

「江州之圖」については、村落名も国内すべてではなく、湖岸と主要街道沿いに限られ、逆に村落の家数まで詳細な情報が

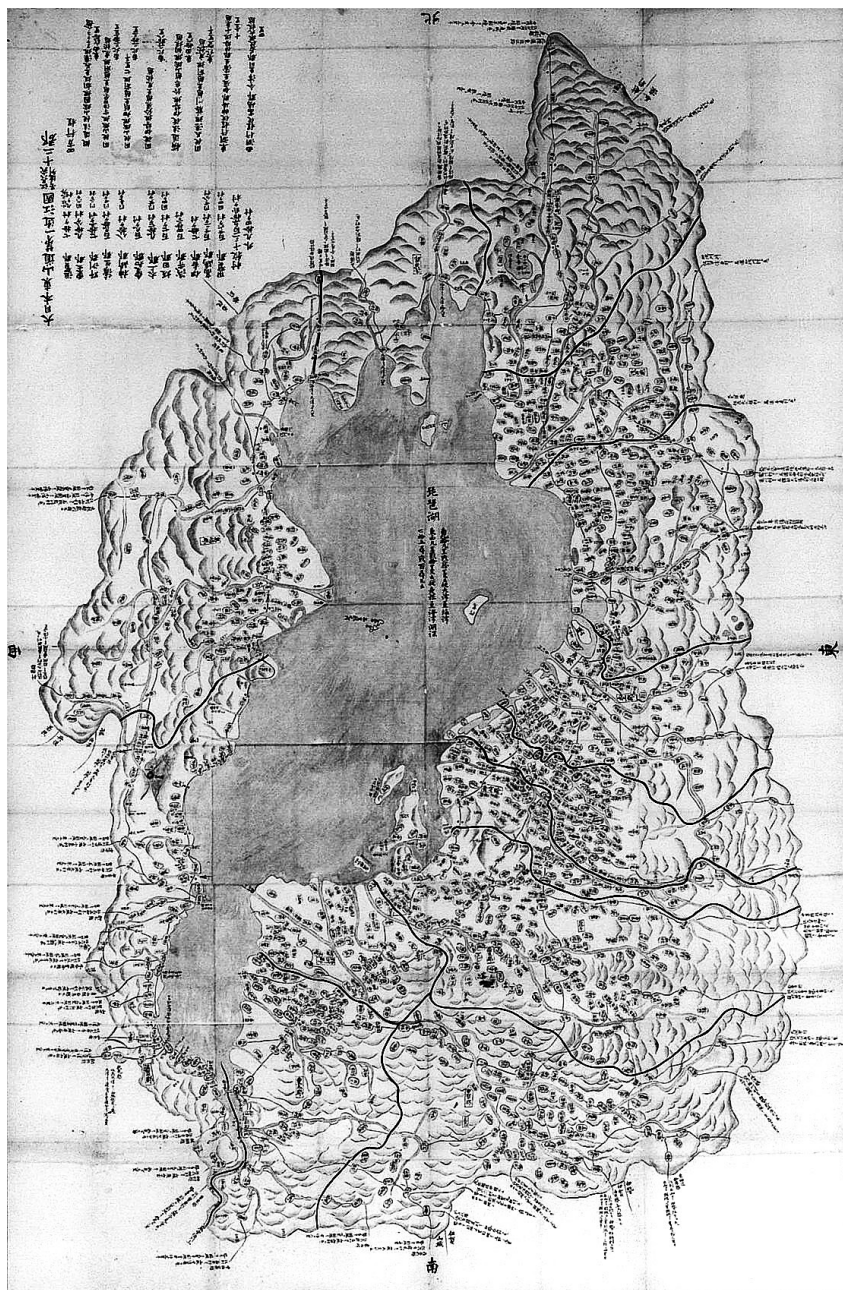


写真14：近江国十二郡国絵図—松井善和氏蔵—

記されている。地図の範囲は近江国全域に渡っているが、全村落名や街道、山々らを網羅する「国絵図」の下書きであるとは判断できない。一方で、湖岸の村落や街道沿いの村落のみが描かれているということを考えると、湖上・街道交通の情報に集約されていると考えることができる。

この地図の制作目的は、これが制作途中である、あるいは下書きであるという前提で、湖上交通の上では、湖岸の村落の地勢を知ること、陸上交通においては、街道沿いの村落の様子を知ることにあつたのではないかと思われる。特に、大溝、大津、膳所、彦根という湖岸の町に大きな被害をもたらしたという「寛文近江・若狭地震」の直後ということもあり、湖岸集落の様子を知ることが何をおいても重要な事であつたと考えられる。しかし、その目的を明確にするためには、やはり「誰が」と言うことも含めて考える必要がある。次項でそれについて検証してみたい。

三二一 制作者は誰か

湖岸に面しているほぼすべての集落名と、その集落の家数が記されているというこの地図の最大の特徴を念頭に置くと、この地図の制作を指示した人物は当時琵琶湖の湖上交通を一手に引き受けていた者ということができないであらうか。当時その役割を果たしていたのは船奉行芦浦観音寺（現草津市芦浦町）の歴代住職であつた。特に芦浦観音寺第八世賢珍（けんちん）、

九世詮舜（せんしゅん）、十世朝賢（ちようけん）の三代の住職が豊臣秀吉らのもとで、船奉行として湖上水運を掌握し、近江国内の豊臣家の蔵入地の代官としてもその年貢の収納などを行ない、力を持った。琵琶湖の湖上支配は堅田衆が握つた中世の時代から、近世になり、この芦浦観音寺に移つたのである。江戸時代、徳川政権に移つた後も、船奉行と代官の役割はそのまま引き継がれたが、第十三世朝舜（ちようしゅん）の時、貞享二年（一六八五）にその両職を罷免され、五代約一〇〇年間続いた栄華に終止符が打たれた。

「江州之圖」が描かれた寛文二年（一六六二）の辺りは、芦浦観音寺の全盛が過ぎ、晩期という時期にかかつていたようであるが、「江州諸浦船数帳」という資料を見ると、観音寺が慶安二年（一六四九）と延宝五年（一六七七）に琵琶湖上の船舶数を調査し、まとめている。ちなみに延宝五年の調べによると湖上に浮かぶ船舶の数は二九七七艘であつたと記録されている。

また、堅田の郷士居初家に伝わる「江州諸浦丸船帳」写しには、「江州諸浦舟数并石積加子数入念相改書付指上ケ申候」と記され、湊ごとに一艘ずつ船の大きさを石高示し、それぞれの所有者の名前を書き留めているというかなり詳細な船舶調査が行なわれていたことがわかる。そして、注目したいのは、この写しの奥書に「寛文五年（一六六五）五月 観音寺」と記されていることである。この綿密な調査は「寛文近江・若狭地震」の三年後にまとめられているのである。

「江州之圖」において、

① 湖南部分（特に大津の辺）の湖岸のかたちが非常に正確であること。

② ちようど芦浦観音寺がある草津辺りから眺められる比叡山や湖南周辺の山々が大変大きく強調されていること。

③ 草津を分岐とする東海道が草津を中心に、鈴鹿越えに向けて付け足されていることや、対岸である京都へ向けての東海道の解説が詳しいこと。

④ 貼り紙のかたちで地図に貼られている四枚の文章のうち地震の様子が書かれている以外の三枚は社寺の詳しい解説であること。

など含めて考えると、幕府の命令があつたかどうかは別にし、芦浦観音寺の住職が、船奉行としてまた、蔵入地（天領）代官として、地震が発生した寛文二年（一六六二）にすでに調査を開始し、先ず湖岸周辺の集落の様子などを記す地図を書き始めていたと考えられないであろうか。

今回の報告で、すべてを結論づけることは難しいが、「江州之圖」の制作者を可能性として近世琵琶湖の船奉行芦浦観音寺とした。

まだまだこの報告は調査の余地も残している。朱色で玄蕃殿の領地いわゆる彦根藩の領地を大きく記している点や、彦根藩も大規模な舟数調査を実施しているという史実もあり、この地図が彦根藩の指示によって書かれたとの見方もできるかもしれない。

ない。もう少し幅を広げて、今後もこの調査を進めていきたいと考えている。

おわりに

昨年四月に附属近江学研究所の平成二四年度がスタートした直後、近江の古地図収集家の松井善和氏と、そして、その松井氏が所蔵する「江州之圖」という素晴らしい古地図との出会いがあった。松井氏とともに研究所でこの地図をゆつくり広げてその全容を見た瞬間、先ずその大きさに驚き、次にまぶしく濃紺の琵琶湖が目飛び込んできた。その琵琶湖の周りには細かく文字が書き込まれていた。

「何のために描かれたのか」、よく見ると修正箇所や付け足し部分が多いこの地図を見て直感的にそう思った。そして、同時に調べてみたいという興味にかられた。

六月に近江学研究会が学内で開催された時、研究会に出席された本研究所客員研究員で京都府立大学名誉教授、長浜バイオ大学教授の水本邦彦先生にこの地図を見ていただいた。水本先生も非常にこの地図に興味を持たれ、この地図の調査にご協力いただけることになった。

まだまだこの地図の調査は始まったばかりであるが、近年、琵琶湖西岸の活断層が引き起こす大地震の発生が懸念されており、また、東日本大震災後の原子力発電所の問題等は、近江で

生活する人々にとって非常に関心が高い事項である。そのよう
な中で、この地図の中に朽木村に大被害をもたらした「寛文近
江・若狭地震」の記事が貼られてあり、歴史地震の新史料の発
見となったことは大変意義がある。推定マグニチュード七・六
という内陸地震としては他に見られない大規模地震であった寛
文の地震が今琵琶湖西岸の断層で発生したならば、敦賀・若狭
の原子力発電所にどのような被害が出るのであろうか。

今回の史料の発見が、過去に起った大災害の記録を呼び起こ
し、近江の防災意識につながれば、この地図との出会いに大き
な意味があったと思う次第である。

最後になりましたが、難解な近世の文字の解読と、地図制作
者の特定に際しては、貴重な見解を示唆いただいた水本邦彦先
生と、素晴らしい出会いをつくっていただき、大切な地図を長
期間お貸しいただくなど、ご協力いただきました松井善和さん
に厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- ・「寛文二年（一六六二）近江・若狭地震の地震像と被災地区
の歴史地理的考察」京都歴史災害研究 第五号（二〇〇六）
小松原琢
- ・「活断層調査と文献史料から推定した寛文二年（一六六二）
若狭・近江地震の起震断層と震源過程」歴史地震 第二〇号

- （二〇〇五）西山昭仁（大谷大学大学院 文学研究科）、小
松原琢（産業技術総合研究所地質情報研究部門）、東幸代・
水野章二（滋賀県立大学人間文化学部）、北原糸子（神奈川
大学大学院 歴史民俗資料学研究科）、武村雅之（鹿島小堀
研究室）、寒川旭（産業技術総合研究所関西センター）
- ・『地震の日本史』中公新書（二〇〇七）寒川旭著
- ・「琵琶湖の船奉行芦浦観音寺」平成十一年（一九九九）芦浦
観音寺特別公開 高島幸次（夙川学院短期大学）
- ・「芦浦観音寺―その景観と歴史の特性―」滋賀県文化財教室
シリーズ二二七号（二〇〇六）草津市教育委員会文化財保護
課 課長 別所健二
- ・『近世琵琶湖水運の研究』思文閣出版（二〇一一）杉江進著



成安造形大学附属近江学研究所紀要 第2号

発行日 平成25年3月28日

発行者 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2013
ISSN 2186-6937